

人間関係とコミュニケーションに注目した学びの場づくり

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター

学校が居心地のわるい場所になっている。教室には大事に伝えたり受けとったりする関係が築かれていないために、教科に関わりなく、全ての学習が危機に追い込まれている。学校を、安心して学べる場所にしたいが、従来の授業も授業研究も、コンテンツや形式を優先する傾向が強く、「生き物」と言ってもよいような教室の現実への対応が疎かになってきていた。今や多くの教室が、ベテランの先生方でも手に負えない状況になっていて、何とかしたいが、そのための研究知が現場にもなかなか蓄積されていない。

筆者は、学校における教育活動を、人間関係とコミュニケーションの状態に注意して見つめなおすことで、問題を明確にし、学びの起きる関係性を築いていきたいと考えている。そのためには、一人ひとりをほんとうに受け入れてそれぞれの個性を生かせるような教育活動のあり方をデザインすることが求められていると思う。幸い、学校の内外の最近の動きの中に、そのような実践を見出すことができる。

大阪初の総合学科である松原高校は、自校の生徒の実情に合わせた手作りの講座を提供することで、学ぶことの喜びを追求し、学ぶことによってできあがる関わりを大切にしている。「学び方を学ぶ」というのがスクールコンセプトになっているが、松原高校の取り組みは、総合学習や総合学科というオルタナティブな学びを、従来からある教科学習を照らす鏡として生かすことの可能性も含んでいる。とはいえ、教科学習の場は依然としてしんどいところがある。オルタナティブな学びから得られた経験知を積極的に生かすことや、授業研究を充実させていくことで、学びの場づくりの可能性をさらに高めていくことができると思われる。

民間のファシリテーター集団であるマザーアース・エデュケーションは、さまざまな場で、人と人のつながりを丁寧に築いていくための手助けをしている。学校介入においては、コミュニケーションのとり方や協力の仕方を、遊びの中で学び、集団でうまく過ごすときの楽しさや気持ちよさを味わうことで、学校内の人間関係を改善する。彼らの活動は、それぞれの人の身体性やライフストーリーを重視し、気持ちの揺れや葛藤と丁寧に付き合い、象徴的な学びを特徴としている。一般的なグループワークやファシリテーションにくらべて、非構成要素が強く、そのことが場づくりのプロセスに大きな力を発揮しており、それを支えているのは、ファシリテーターの身体技法である。何かを学ぼうとするときにはいつも「私」とのつながりが重視されているが、それは全ての人をつなぐテーマでもある。筆者は彼らとの関わりを通して、遊びの重要性や、教師が「子どもと関われる身体」をもつことの重要性を強く感じている。

教師の身体をつくりなおしていくような研修を、学校の中で、授業研究を通して行う方法を、東京大学の佐藤学さんがデザインされ、全国各地の学校で指導されている。徹底し

て生徒の姿、教室で起こっていることにもとづき、教員の気づきを共有することから学び合って授業力や同僚性を高めていく事例研究である。その特徴は、個性の違いを擦り合わせることから学び合う関係を紡いでいくことで、教室の中にも、小さなつぶやきや声にならない言葉を拾いながらつないでいく、「響き合う関わり」をつくりあげていくことが目指されている。そのときに何よりも重視されているのは、授業のプロセスにおける教師の「居方」や「関わり方」である。

しかし、従来の一般的な教育研究においては、コンテンツや抽象性を重視する傾向があって、一回性の要素が強い授業という「場」に臨んでどう関わって伝えていくのかというプロセスと具体性についてはじゅうぶんに研究されてこなかったといえる。学習到達目標はあっても、「どのようにして？」という部分が曖昧なままになっているという現状がある。そのような教育方法の研究は、臨床性の強いものであるだけに、それぞれの学校で教員集団が、そのときのその現場の固有性をよく見つめながら「私」たちの臨床研究を立ち上げていく必要があるが、教員集団の中にそのような関係性がなかなか築かれていないという現状もある。

本論では、学校における人間関係の問題が、教科や領域や、大人であるか子どもであるかということも越えて、誰にとっても重大な課題であることを確認し、関わり方やコミュニケーションの仕方を改めていくことで、学校の中に学びの起こる関係性を築いていくことが可能であることを、具体的な実践に即して述べている。